近い古いものといえよう。それに対して嵐山本は改訂版に相当するもので、楢林鎮山の手を離れてからさらに充実したものになった可能性がある。

フランス本国でも、パレ全集が出版されて二世紀半もたった一八四〇―四一年にマルゲーニュによって大幅に組変えられ、パレ全集完全本として復刻された例がある。

（川崎市立井田病院・慶応義塾大学医史学研究室）

日葡辞書から見た安土桃山時代の医学――四、生理並びに病理現象

亀　節　子

『日葡辞書』の成立当時、わが国では、『啓廸集』（曲直瀬道三著、一五七四年）と『外療新明集』（鷹取秀次著、一五八一年）という、内科と外科のそれぞれの領域で、重要な二つの医書が著わされている。これらの医書には周知のように多数の医学用語が記載されているが、医家の手になる書物の性格上、その大半はいわゆる専門用語に限定されている。それに対し、一般民衆の日常語をも豊富に収録している『日ポ』では、専門書のみからでは期待することのできない用語をも見出すことが可能である。こうした点を踏まえながら、今回は、『日ポ』の中から生理並びに病理現象に関する語を拾い上げ分類、整理を試みたので、若干の特徴や問題点と共に紹介する。

生理現象に関するもの一一二語、病理現象に関するもの

三二六語、各々の分類は次のとおりである。

一、生理現象

Ⅰ　分泌・排泄に関する語―溜め、箱、黄水、カスハイ、耳塵（ニヂン）等五〇語。

①「箱」は、元来大便を受ける容器を意味した語であるが、一二世紀頃には、既に、大便をも差すようになって用いられている。

②尿と精液の呼称名が比較的多く挙げられている。すなわち、「ばり、いばり、しと」および「淫、淫血、淫水、精、精液」の記載を見る。

Ⅱ　Ⅰ以外の一般生理に関する語―息差し、歯軋み、クシャメ、咳（スワブキ）、欠伸等一七語。

Ⅲ　特徴を有する身体語―産髪、猿眼、出歯、赤顔、齶（ニクボ）等三四語。

①「逆睫、鳥肌、鉤鼻、黒子、茄子歯（ナスビバ）、乳朽ちた歯、見上げ歯」以上の七語は、『日ポ』において初めて文献に登場した可能性が考えられる。

Ⅳ　脈と脈状に関する語―滑脈、沈脈、死脈、緊脈、腎脈等十一語。

①「かくゆう」は、『日ポ』に付された説明によると「馬の腹で取る、ある脈搏」となっており、殆ど他に例を見出さない語であるだけに貴重である。但し、経穴のひとつである「膈腧（カクユ）」などの語と取り違えられたとの推測もできようか。

二、病理現象

Ⅰ　皮膚疾患症状名（腫物等）―褫（フバ）け、潮頭、走瘡、飯貫ひ、汗瘡（アセボ）等六四語。

①『外療新明集』にも同じく皮膚疾患症状名が数多く記載されているが、「風陰（カザボロシ）、面皰（ニキビ）、蛇眼疔」ほか約二〇語が『日ポ』と重復を見る。

②『外療新明集』と『日ポ』の間で用語が僅かに変化しているものに「乳腫（チハレ）→ちぶ、喉腫→喉びる、疣目→目疣」がある。

③「あな股腐り、小舌、土肉、たづ瘡、ひ瘡、稗（ヒエ）」以上の六語は、『日ポ』以外の文献に用例を見出し難い。

④「痂子（ホロシ）」は発疹のひとつの呼称として現在も方言の中に姿を留めているが、文献での記載は『日ポ』が最初のものか、一考を要すると思われる。

Ⅱ　Ⅰ以外の一般病名―癥瘕（チョウガ）、感冒、帯下、反胃、中風等一五二語。

①動物の疾患名として「虫腹、足気、結馬、タチ、ちゅう結、ツヂ、鼻気、鼻びる、尿結（バリケツ）、へっかく」の十語の収録を見るが、そのうち半数以上が馬の病名である。

②「背虫、気癪、はくらん、紋腹、渋腹、ほれ気」以上の病名は、当時から江戸時代にかけて広く使用されたものと考察される。

③「かわらけ、みじ気、血酔ひ、上くさ、ヲトナ、産風邪、弟悪阻（ヲトゾワリ）、半頭痛、へぼ、くじ」以上の病名は、珍しい俗語の収録として貴重である。

Ⅲ　Ⅰ以外の症状に関する語―反吐、金負け、手萎え、瘧熱（ギャホツ）、漆負け等五四語。

①「みっちゃ」と「虫唾」の二語は『日ポ』において文献上に初出した可能性が大きい。

Ⅳ　各種病者の呼称名―かんだ、かったい、近眼、痣子（アス）、殫足（コヒアシ）等二八語。

①「ものよし」は癩病人を差し示す語であるが、『日ポ』の説明には「癩病人、あるいは、瘡だらけの人。婦人語。婦人以外の人々の間でも、特に正月の時分などには用いられる。ほかの地方ではハクヨシと言う」とあって、癩病が禁忌視されていた側面をこうした反語の使用の中に窺うことができる。

Ⅴ　異常を伴う身体語―爛れ目、虫食歯、濁血、膿、疱瘡面等二〇語。

Ⅵ　病因に関する語―邪風、風邪、田虫、虫、壺虫の五語。

以上であるが、全体的な特徴として、皮膚疾患症状名が極めて精細に収録されている点が目につくと言えよう。これについては、当時の身体知見が専ら体表部に限られていたこと、また、自然と密着した当時の生活環境など諸原因が考えられ得る。その他、「へぼ、ヲトナ、みじ気」などの俗語の記載は特に重要と思われるので、ここに重ねて特記しておく。

（東京医科大学衛生学公衆衛生学教室）